

B-11 外気中における布損傷について —大気汚染度差による布への影響(I)—

福岡教育大 高野 延子

1. 科学技術の著しい進歩は、生活を豊かにしたがその反面各種の公害が発生した。大気汚染もその一つ、殊に北九州の工業地帯の汚染は著しく、人間の健康をむしばみ、家屋の金属製品をいためている。布にも影響があると考え、大気汚染度の差によって布の性能にいかなる違いを生じるか、更に逐月的にどのような変化をするかを調査実験する目的で本実験をおこなった。

2. 北九州市の汚染度の著しい工業地帯と汚染度の少ない住宅地帯とを、北九州市衛生研究所の資料に基き選出し、前者(A)として同市八幡区枝光小学校、後者(B)として同市同区高槻校とした。これらの場所はいずれも北九州市衛生研究所が大気汚染基礎的調査をおこなっている。材料：天竺木綿、モスリン、エステル系繊維、ナイロン、いずれも白無地平織組織、試料のつくり方：各材料を洗淨、乾燥したものを木枠に張り、A地区、B地区において学校屋上の屋根だけある箇所を期間1カ月(昭和44年6月1日～30日)、2カ月(同年6月1日～7月31日)、3カ月(同年6月1日～8月31日)、大気中にさらした。これらの試料布を、汚染されたままのもの、汚染した布をランドテスターにて洗淨したものと二者にわけそれぞれ実験した。

3. B地区は期間の短い間は、すべて原布との差は少ないが、A地区は差が大で、期間が長くなる程両地区間の差は大となる。